

◆書評◆

鈴木彩加著

『女性たちの保守運動』

右傾化する日本社会のジェンダー』

(人文書院 2019年 ISBN 9784409241288 4500円+税)



具 裕珍

(東京大学 東アジア藝文書院)

日本の政治社会における「右傾化」現象や活動について、多くの研究者が不思議に思っていることがある。それは様々な場所で活躍する女性たちの存在である。過激なナショナリズムや家父長的秩序が色濃く表れている伝統的価値の維持を掲げる保守運動に、女性たちはなぜ参加するのであろうか。本書は、女性たちの保守運動をジェンダーの観点から捉え直し、そこに内在する社会構造とジェンダー間の緊張関係を紐解くことで、女性たちの保守運動を理解する手掛かりを提供してくれる。

本書の主な問いは、あらゆる女性が生きやすい社会の実現を目指すフェミニズムに反対する保守運動に多くの女性が参加するのはなぜなのかというものである。こうした興味深い問いに、本書は方法論的にも挑戦している。差別的主張や攻撃的な活動方式を展開する極右運動には、研究者にとって賛同しがたい場合が

多く、調査の困難さが指摘されてきた。本書は濃密なフィールドワークを行うだけでなく、保守団体の刊行物からインターネット上にアップロードされた動画まで多様なデータを用いて、閉鎖的な性格を有する保守運動研究への新たな実証的アプローチを試みている。

以下では各章の内容を見ていこう。

まず、序章「保守運動の台頭とジェンダー」では、上記のような問題提起と「保守運動」の定義が提示されている。実際、分析対象となっている集団は論者によって「右翼」「排外主義」「レイシスト」とも呼ばれており、用語をめぐる議論はいまだ不十分といえよう。そこで著者はとりわけ保守主義と保守運動を区分し、左右という政治的対立構図の有効性を再確認した上で、それに基づき「保守運動」を「戦前の旧体制と日米安保を支持し、福祉制度の充実と市民の平等な政治参加には否定的な立場をとり、「愛国心」を唱えるナ

シヨナリズムと結びついた運動」と定義している(34頁)。こうした用語の選択と定義はこの運動の捉え方をめぐる議論を豊かにする¹。

第一部「女性たちの保守運動を捉える視点」では、女性たちの保守運動の分析枠組みとして、戦後日本社会における保守運動の系譜(第一章)と米国の右派女性研究(第二章)という二つの軸が提示されている。女性たちの保守運動は日本の保守運動史においてどのように位置付けることができるのか。興味深いのは、本書が日本の保守運動の始点として日本遺族会の靖国神社公式参拝運動を取り上げている点である。これは、日本の最大保守系団体と言われている「日本会議」の源流を元号法制化運動に見いだす多くの研究と異なる点である。

著者は1990年代に日本の保守運動には「組織化された保守運動」(日本会議)と「草の根保守運動」(新しい歴史教科書をつくる会)という二つの潮流ができ、それを背景にして2000年以降に「男女共同参画反対運動」と「行動する保守」グループによる日本軍「慰安婦」バッシングが現れたと主張する。いずれも草の根の女性たちが主な担い手となる保守運動であることが新しいと指摘している(77頁)。さらに、著者は米国の右派女性研究を整理し、そこから、右派女性を捉える(1)

被害者、(2) 運動主体、(3) フェミニスト(101-103頁)という三つの観点を導き出し、それに照らして日本の女性たちの保守運動を考察している。

こうした分析枠組みに基づいて、第二部「保守運動と家族」では、男女共同参画反対運動の事例を通して、「母親」の立場で活動する女性たちの保守運動の実態について、彼女たちを取り巻く構造としての「家族」に着目し、その関係から考察している。第三章では、その「家族」という構造の変遷を日本遺族会の会報を分析することで明らかにしている。戦後直後、日本遺族会における家族言説は“苦勞する母親”像(126頁)を中心として構築されていたが、運動主体と世代の変化に伴い、「家族」と国家や愛国心に傾きはじめ、さらには稼ぎ手である夫と専業主婦である妻およびその子どもという家族イメージの「家族の価値」(115, 134頁)へと移行していったのである。

では、今日の「家族の価値」はどのように語られているのか。第四章では男女共同参画反対運動が盛んになった時期の保守系雑誌記事の語り手に着目して、その言説が分析されている。著者は発言主体によって「主流派バックラッシュ」と「主婦バックラッシュ」にその言説を分類し、両者の間に論理のずれが内在していることを指摘する。「主流派」は、「家族」は国家

1 関連する議論として具裕珍(2021)「日本政治における保守の変容への一考察:1990年以降の「保守市民社会」の台頭に着目して」『東洋文化研究所紀要』179号を参照。

や社会秩序を維持するために必要な基盤だから、という論理で、その基盤を破壊する男女共同参画に反対している。一方「主婦」は、家事や育児・介護といった家庭内ケア労働を通して構築された家族の人間関係を重視し、それが男女共同参画によって損なわれる、という論理で反対しているという。この点から著者は「主婦バックラッシュ」が、「自己防衛」といった消極的な動機にもとづいたものではなく、むしろ「ケアの倫理」や「ケア・フェミニズム」とも類似した積極的な理由にもとづいている」と、目新しいスリリングな主張を行う(166, 172頁)。こういった言説は愛媛県の市民団体A会でのフィールドワークでも確認されている(第五章)。

第三部「保守運動と女性の生／性」では、「慰安婦」バッシングを行う「行動する保守」を取り上げ、「女性」という立場からの保守運動の実態を考察する。インターネット上の動画の内容分析を通して、「行動する保守」の女性たちが置かれた立場の複雑性を明らかにする(第六章)。その複雑さは日韓の歴史認識問題である以前に、女性の性に関する問題として、「女性」が性的客体化される社会構造を認識していることに起因する。こうした認識は東京の市民団体B会へのフィールドワークから再確認されている(第七章)。

以上の議論から得られる知見を元に、終章「日本社会で生きる女性たちの保守運動—その困難と展望」では、女性たちの

保守運動を生み出した要因、女性たちの保守運動が持つ両義性、そして「女性運動」としての保守運動の可能性が論じられ、締め括られている。

最後に本書の持つ意義を整理して筆をおくことにしたい。第一に、本書は日本の保守運動を保守運動自体ではなく、参加する女性にフォーカスして参加理由とその実態を明らかにしている点において、保守運動の研究を豊かにしている。第二に、本書は日本社会における保守運動を“ジェンダー観点”から分析することで、日本社会におけるジェンダー論との接点を見出している。入り口は「保守運動としての女性運動」であったが、終章で本書は「女性運動」の文脈の中でこの運動が捉えられるのではないかとといった「保守フェミニズム」の可能性も論じている(314頁)。まだ日本の文脈では時期尚早かもしれないが、こうした枠組みを用いれば、本書で示された事例と知見に加え、日本社会における世代間の性別役割規範や性差別規範の変化と相違から、保守運動の新たな実態が浮かび上がってくるのではないか。これと関連して、第三に、ジェンダー規範をめぐる日本と類似した社会構造を持つ他の国々との国際比較も可能であるだろう。例えば、韓国でも保守運動が存在し、その中で「オンマブデ(母親部隊)」は類似した言説や活動を展開している。本書を発端とした多様な比較研究が期待されるところである。